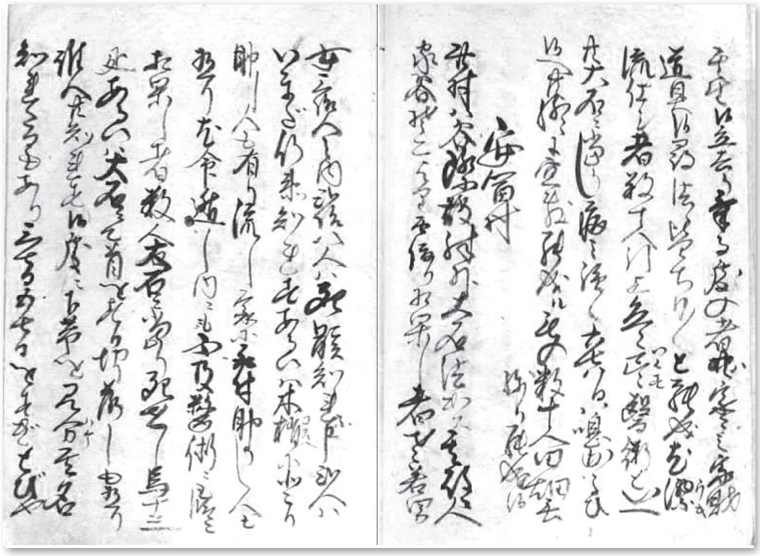
『耳納風土記』③壊山（くえやま）物語

皆様がこの記事を目にする頃は梅雨が明けているでしょうか？この時期だからこそ、そして今年だからこそ皆様にご一読いただきたい、そんな耳納風土記第3回です。

今からちょうど300年前の享保5年（1720）、江戸時代に耳納連山で大規模な土砂災害が起こっています。この享保5年の土砂災害は、梅雨末期に3日間降り続いた豪雨により起こったもので、降り方、災害の規模は平成29年九州北部豪雨を彷彿とさせます。その様子を「壊山（くえやま）物語」と題された古文書から読み解いてみましょう。

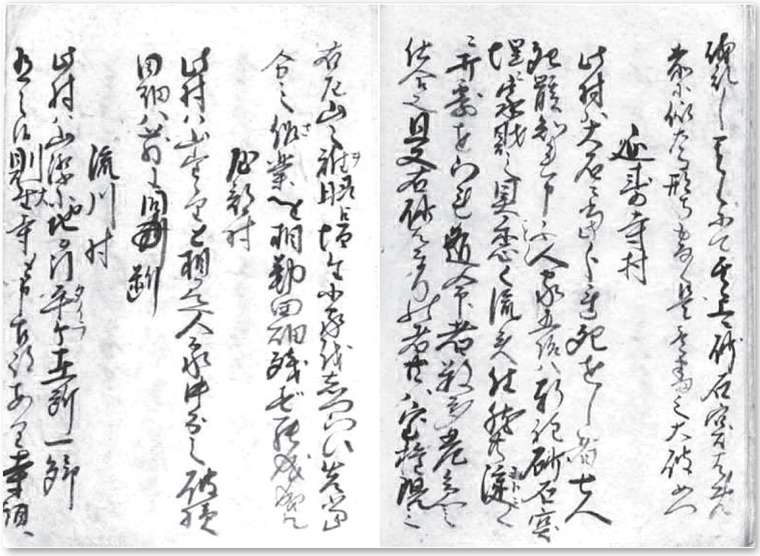
この文書には当時の竹野郡、山本郡、生葉郡の田畑、家の被害状況や被害者数などが克明に記録されており、当時の悲惨な状況が生々しく伝えられています。被害が特に大きかったのは現在の福富校区にあった村々ですが、その記述をいくつか紹介します。

安富村の記述には「此村（このむら）ハ谷際（たにぎわ）故殊外大石詰出ス（ゆえことのほかおおいしつめだす）其故ニ（それゆえ）人家（じんか）谷そこより覆（くつがえ）り相果てし者老若男女三拾人（中略）三十軒の在所なるが三軒残し斗（ばか）りにて跡は石川原と罷成（まかりな）ル（中略）大木数多有之（たいぼくあまたこれあり）しもことごと根こげ仕（つかまつる）さんを乱しことごとにて其上（そのうえ）ニ砂石突（すないしつき）はめ前に似たる形もなく是壱番の大破めつ」とあり、家が土台から流され、30人もの死者が出たこと、大木が根こそぎ流れ土砂とともに押し寄せ、集落がほぼ壊滅したことが分かります。



安富村の記述は壊山物語の中で一番長く、被害の大きさが伺える（写真は安富村の記述一部）。

隣の延寿村は「（前略）人家五拾八軒砂石突埋ニ（すないしつきうみ）家財之具悉く（かざいのぐことごと）流出仕然共淀淀ニ（りゅうしゅつつかまつるしかれどもよどよど）打寄せられ遁命者数多危急之仕合也（とんめいのものあまたききゅうのしあわせなり）」とあり、家は土砂で埋まり家財は多く失われたものの押し寄せる土砂の流れが比較的ゆっくりだったため命を取り留めたものが多くいたことが分かります。当時の安富村は現在よりもっと南の谷筋にあり、享保の災害後に現在の場所に再建されたものですが、村の場所によって被害状況が大きく異なることが分かる興味深い記述です。



延寿寺村の記述

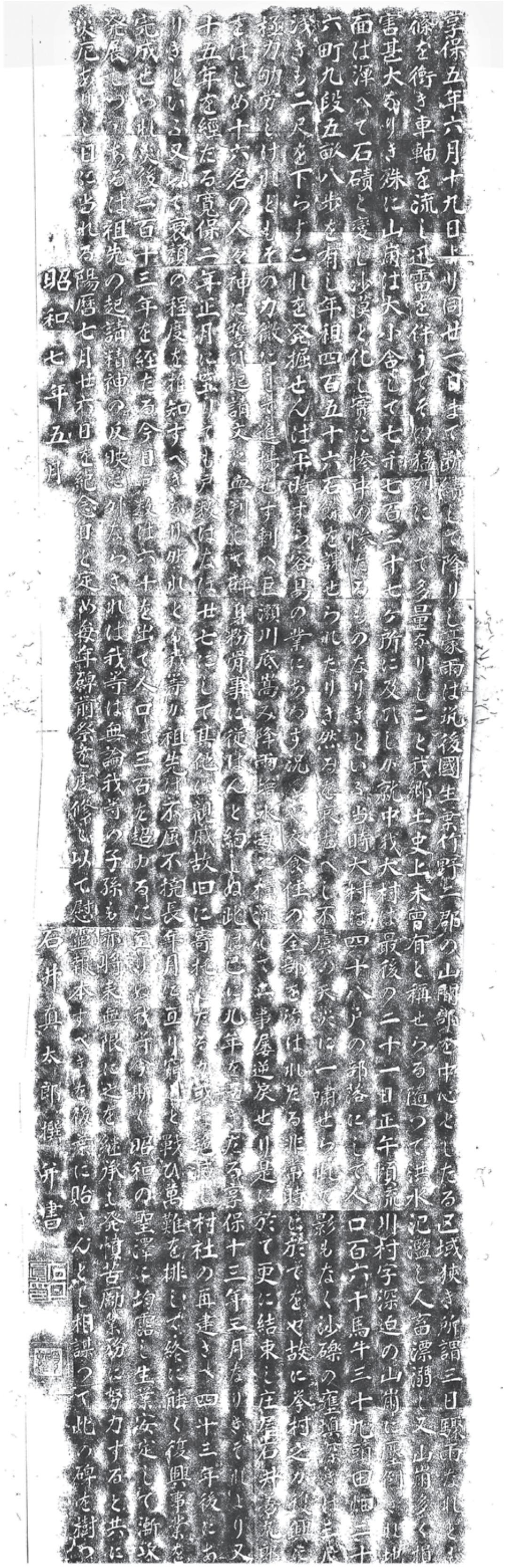
では次に、市内に残された享保5年の災害の記憶を見ていきましょう。現在のように、写真や映像などで災害の記憶を伝える手段が無かった昔、災害を経験した人々は、しばしば石碑に記憶を刻みました。

大村復興碑表面

その１つが大村集落の天満宮境内の高さ4ｍ弱にも及ぶ巨大な石碑です。建立されたのは昭和7年（1932）ですが、表面には大きく「大村復興碑」の文字が彫られており、裏面に災害の発生と復興の様子を記した長い碑文が刻まれています。

碑文を現代語で要約すると次のようなことが書かれています。「大村は21日正午頃に発生した流川深迫の山崩れに襲われ、地面はすべて土砂の砂漠と化し、惨状は目を覆うばかりであった。土砂の深さは60㎝～90㎝にも及び、さらに巨瀬川に溜まった土砂の影響でたびたび氾濫が発生し、復興事業は何十年にも及んだ。このような困難の中で、世代を超えた復興が遂に成し遂げられた。自分たちも、子孫もこれから先、この精神を受け継いで努力せねばならない。災害が発生した太陽暦7月26日を記念日とし、祖先の恩に報い、さらにこのことを後世に伝えるために復興碑を建てることにした。」先祖の苦労と、願いが読み取れる碑文です。

大きな災害が起きると、それを語り継ぐことが大事だとよく言われます。それはなにも、犠牲になった人々を慰めるためばかりではありません。生き残った人々が、子孫に同じ悲しみを味わってほしくないためでもあるのです。うきは市は耳納連山と筑後川に挟まれ、これらは豊かな恵みをもたらしてくれる一方で時には牙をむくことも決して忘れてはいけません。災害に対して危機感を持ち、自分や周りの人の身を守ることで祖先の想いに応え、そして未来に受け継いでいきましょう。


大村復興碑裏面碑文拓本